

島のむんがたり

集落内の通信手段・非常時の
サンテンショウ（三點鐘）



不発弾から転用された半鐘①
(手々小中学校管理)

人々は迅速に正確な内容の情報をお伝えるためにさまざま工夫をこらしてきました。しかし戦前・戦後の間もないころには、手軽に使える通信機器はありませんでした。たとえば、無線機や電話機はそれほど一般に普及しておらず、当然、パソコンや携帯電話などもなかつたのです。そのようななかで、やはり有効な手段となつたのは、人の言葉を介して伝える「伝言」や、仲間どうしであらかじめ決めた内容を聴覚や視覚などに訴える「信号」を活用することでした。シマ（集落）での生活で特に情報伝達が必要とされる場面は、シマでの大事な決まりごとを決める集まりや、労働奉仕のユイ

ワクなどの日取りや内容を伝えたり、住民の中に不幸があつてそのトムライ（弔い）に関する情報を伝えたり、さらには火災や風・水害などの緊急事態に遭つたりするようなときでした。通信手段を持たないひと昔前には伝達役の人を立てて遣わしたり、鐘の音を通じて知らせたりしていたのです。さて、ご年配の方々は半鐘（はんしよう）を覚えておいで下さい。その鐘の音は、ときに集落の人々に時刻や事態の急を告げるために、前もって決められた数を打ち鳴らしていました。一般に、集落の公民館や青年会場、消防小屋や倉庫、郵便局、学校などの見晴らしの良い、公的な場所に吊るされていました。火災など

の緊急時に鳴らされる鐘の音は「カン、カン、カン」というかん高い金属音でよく知られています。これはサンテンショウ（三點鐘）といつて全国共通の打ち鳴らし方で、今では消防車などの緊急車両が通行時に鳴

らされるサイレン音でお馴染みです。今日のように水道が完備されているわけではなく、また消防の機材が乏しかつた往時にあつては、人々に現状を伝え、大勢の協力を得ながら消火にあたり被害を最小限度にとどめようと単純で明快な音が必要とされたのでした。

半鐘の多くは、戦時に「金属供出」という名目で、鍋・釜や日常生活の金属製品とともに軍隊に提供されました。そのため住民たちは、戦後になってからはアメリカ軍が落していった不発弾を加工して利用していました（のちにはガスボンベなども利用されました）。こうした鐘の存在は、物はなくとも迅速に正確に情報を伝え少しでも事態を改善したいという、人々の



不発弾から転用された半鐘②
(山集落消防倉庫管理)



時刻を知らせるために使われたガスボンベ
(井之川公民館に所在。現在撤去。)